

【続編】主婦なのに満員電車でイケオジのクリ責め痴漢に理性を溶かされ、ホテルに連れ込まれて中出しされた話

サンプル（一部抜粋）

夕方18時。

これは私が解放される時間…。

カッコよく着こなしたスーツ。余裕がありそうな後ろ姿。太い指…。

駅のホームで五十嵐さんを見つけると、どくと胸が高鳴る。

今日もクリトリスを虐めてもらえる。気持ちよくて、強制的にイカされるあの絶頂感…。
思い出しただけで、身体がぞわぞわと目覚めて、五十嵐さんが欲しくなる。

ホームで並ぶ彼の元へ、足を一步踏み出そうとした。

ただどその瞬間、

「美雪。」

と後ろから冷たい声が聞こえた。

「あな…た…」

嫌な汗が背中を流れる。

「会社出る時連絡しろよ。同じ時間なら一緒に帰るって約束だろ。」

「あ、うん…ごめん…。」

いつもは仕事を終える時間が違うのに、なんで今日に限って…。

そう思いながらチラッと五十嵐さんの方を見る。

五十嵐さんはわずかに振り返って、じとと夫を冷たく見つめて、すぐに顔を戻してしまった。

「っ…」

今日は…五十嵐さんに触れてもらえないんだ…。イケないんだ…。そう思うだけで悲しくて、満たされない欲求をどうすればいいのかも分からなくて…ため息をついた。

「おい、聞いてんの？」

「え？」

「だから飯。今日の飯どうすんだって。」

「あ、ごめん…。今日…なにしようか。」

「それを考えるのがお前の仕事だろ。」

「……ハンバーグとかでいい…？」

家にある材料を思い浮かべながら、口を開く。

「ハンバーグ……？えー。そういう気分じゃないんだよなあ。」
夫はぶつぶつと文句を言う。文句があるなら、自分で考えればいいのに。もやもやと心が荒んでいく。

その時轟音を立てながら、電車が到着した。

五十嵐さんの手が恋しい。こんな苦しい日常を溶かしてくれるのは、五十嵐さんだけなのに……。
人の波に乗って、夫と共に電車へと乗り込む……。

駅員さんがぎゅうぎゅうと乗客を押し込んでいく……。

そんな中で……ぎゅつと後ろから手を握られた。

「っ！」

五十嵐さんの手だ……。毎日毎日……手を繋いでいたら覚えるものなんだな。少し乾燥した太い指。
若者とは違う、皺が入った手。

他人に興味がない人達の下で、私をそっと癒してくれる優しい手。

（中略）

「あ……あ……んっ」

お腹の下あたりから、快感がぞわぞわと身体を駆け巡る。どうしよう。このままじゃイっちゃ

う……。気持ちいい……。もつと……。つ。

「は……。あ……。つ、あ……。つ」

調教済みのクリトリスを、絶頂に追い込む事なんて……。五十嵐さんにとっては簡単な事なんだろう。

実際にたった十数回擦られただけで、私はもう限界だった。

「や……。あ……。つ、イ……。あ……。つっ!!」

ビクンと小さく身体を震わせ、夫の目の前でイってしまった。

「は……。あ……。あ……」

余韻で声が漏れてしまう。

五十嵐さんは、『いい子だね。』と褒めるように、下腹部を優しく撫でてくれていた。

だけどその瞬間、夫と目があつた。

夫は私の顔を見て、イヤホンを外し、

「なに？」

と怪訝な表情で聞いてきた。

「なにも……」

「顔、赤いけど。」

「あ…暑くて…」

「ふーん。」

ねっとり私の顔を見つめる夫。私はこの視線を知っている…。

夫がこの目で私を見るのは…やりたくなった時だけ。五十嵐さんとの関係が始まってから、夫とはしていなかったのに…。

夫とのセックスではどうせ、満足も出来ないのに…。一人よがりに入れて腰を振るだけなのに…。パンパンに勃起したクリトリスを見る事もなく、スッと視線を逸らした。

そう思うと夫の目を直視できなくて、スッと視線を逸らした。

「…今日は外食にする？」

夫は私の頭を軽くポンと撫で、いつもより少し優しいトーンでそう言い始めた。

「え…？」

「たまにはどう？酒でも飲んでさ。」

「……」

はあ…セックスしたいからこその機嫌取りか。

そんなのは要らないのに…。

小さく息を吐いたけど…断ったら怒って面倒くさいことになるんだろうなと思うと、断る選択肢なんてなかった。

「……いいね。外食。」

小さく微笑んでそう返すと、夫は満足そうに頷いて、イヤホンを耳に突っ込みなおし、スマホへと視線を落とした。

（中略）

18時。

やっと私達の時間がやってきた。

到着する電車に手を繋いだまま乗り込み、ドア側の隅で窓ガラス越しに視線を合わせる。

五十嵐さんはそつと後ろから私を抱きしめ、躊躇することなくそのままスカートの中へと手を滑らせる。

「……」

内ももをなぞられるだけで、身体がぞくぞくする。昨日の中途半端な愛撫が、満足しきれなかった身体が、やっと与えられる快感を期待するかのような感覚。

「声、ちゃんと我慢しなきゃダメだよ。」

耳元で紡がれる甘い命令。

「は……」

五十嵐さんはクスッと笑って

「頑張ってね。」

と言いつち…そのまま下着の中へと指を侵入させた。

「っ…」

こり…むにゅ…クリトリスを弄ぶように、強弱をつけて指で弾く。

「は…あ…あ…」

腰が浮いてしまう。気持ちよくて、ぞくぞく駆け巡る快感を制御できない。

「まず、軽くイっておこうか。」

五十嵐さんはそう言うのと、クパッとクリトリスをむき出しにし、ゴリゴリと指で摺り上げられる。

「あ、あ、んん…っ」

「しーっ」

「だって…っ、や…あ…イ…っ」

「…いいよ。静かにね。」

「あ、んん…っっ!!」

ガクガクと身体を痙攣させ、五十嵐さんの腕に支えられ…簡単に果ててしまった。

夫とのセックスでは何も感じないのに、やっぱり五十嵐さんじゃなきゃダメなんだ…。
更に一段深い沼へと、墮とされていく…。

「クリトリス、すごいひくひくしてるね。」

おまんこも、もうぬるぬるだよ。」

くちゅっ…と小さな音を立てて、愛液を拭い、クリトリスをぐちゅぐちゅと挟られる。

「ひ…う…あ…今…だめ…っっ」

「次で降りる？」

「…っ、降りたい…五十嵐さん…愛して…っ」

身体も頭も心も、何もかもがもう限界だった。

「いいよ。全部愛してあげる。」

甘い甘い声…。心地が良くて…どうして私は…既婚者なんだろうかと自分を恨みたくなる。

でも彼の胸へ、全てを捨てて飛び込む勇氣もない。

きつと一番ずるいのは私だ。

（中略）

五十嵐さんはそんな私の腰をガシッと掴み、唇が離れないように、逃がさないように…私を愛撫し続ける。

「今…あ…あ…っ、だめ、いっ…ぐ…あ…あ…あ…っっ!!」

イってる最中なのに、また突き落とされてしまう。

声を出す余裕すらもない快感の中で、抱えきれない快感を涙として流し、私は果てる。

「まだだよ。おまんこも一緒に気持ちよくなろうね。」

五十嵐さんは優しくそう眩きながら、私の中に指を入れ敏感な場所を押し上げ、クリトリスを吸いながら舌でゴリゴリと刺激し始めた。

「ひぁぁぁぁ、ぁぁぁぁ…そこ、や…ぁ…イっちゃう…きもちい…よぉ、っ
~~~~~♡♡♡~~~~~

フツと頭が軽くなった。

身体が痙攣している自覚だけはあるけれど、もう…気持ちよすぎて、全てを抱えきれない…。  
「美雪？」

五十嵐さんの甘い声だけが頭をこだまする。答えたいのに、答えられない。

「…びくびく痙攣して、かわいいね。」

褒めるような声と共にベルトを外す音が聞こえる。

また五十嵐さんのモノに満たしてもらえると、幸せな未来を想像して、真っ白な頭の中でその瞬間を待つ。

「奥まで全部上書きしてあげるから。」

低い声が響いた瞬間、ズンツと身体の内奥の内奥に激しい衝撃と快感が貫いた。

「ぐ…う…ぁぁ、五十嵐…さん…っっ」

「やっとう起きた？」

「ひ…ぁ…っ、奥…気持ちいい…っ」

「まだ動いてないのに、気持ちいいの？」

「は…あつ、気持ちいい…よお…っ…」

「……」

五十嵐さんはびくびくと身体を震わせる私を見下ろし、そつと私のお腹を撫でる。

「…っ、……？」

「昨日は、あの後…旦那さんとシたんだよね？」

（全容は製品版にて）